

Title	日本語の時間表現に関する認知意味論的研究(Abstract_要旨)
Author(s)	寺崎, 知之
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2016-03-23
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k19796
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	ETD

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	寺崎 知之
論文題目	日本語の時間表現に関する認知意味論的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、認知言語学的観点から日本語の時間表現を考察し、時間の概念化がどのように言語表現として立ち現れるかを観察することにより、人間の認知メカニズムの一側面を探究することを目的としている。</p> <p>序論の第1章に続き第2章では、認知言語学をはじめとする言語理論や関連分野において時間がどのように扱われてきたか、空間との関係性を中心に概観する。時間については物理学や哲学など多岐にわたる分野で研究の蓄積があるが、本論文ではこの中でも言語学に隣接する分野に限定し、民俗学的な古代から現代への時間観の変遷、特に日本における時間のあり方を確認する。また、物理学的な視座に立った「科学としての時間観」についても概観し、その中から「時間の順序性」という時間の本質と考えられる概念を取り上げ、後の議論の基盤とする。</p> <p>第3章では、本論文で扱う理論的道具立てについて俯瞰し、どのような立脚点から時間表現を分析するかを提示する。はじめに時間の概念領域、パースペクティブおよび概念メタファー理論といった認知意味論の主要な観念を概要し、それらに内在する時空間の関係性にまつわる問題点を指摘する。本論文では、時間語彙の複雑さを捉えるため「両義的原義図式」というモデルを独自に提示し、時間と空間の未分化な事態認知を基本概念とすることを提案する。このモデルを足がかりとし、実際に知覚処理を行う際に時間がどのように言語として出力されうるかを以下の章で考察する。</p> <p>第4章以降は時間表現の事例研究である。第4章では名詞語彙の一つとして「サキ(先)」を扱い、時間と空間の双方に意味の領域を広げる事例を分析する。サキの2つの時間的用法のうち、「次の休みはまだ<u>先</u>だ」のような LATER IS FRONT 型のサキには、「太郎は郵便局の<u>先</u>にいる」のような空間的サキとのメトニミー的な繋がりを認めるが、「<u>先</u>の総理大臣」「<u>先</u>について代金を払う」のような EARLIER IS FRONT 型のサキは、1つの総体と捉えられた時間に内在する「順序性」に基づいており、空間的用法のサキにはない、時間的用法独自の意味が見出だされる。このように「サキ」の時間的用法は、「時間語彙は空間語彙に依拠する」という認知意味論の基本的想定¹⁾の反例となることを提示する。</p>			

第5章では、空間的用法から生じたと思われる時間表現「アタリ」「ウチ」「アイダ」「トコロ」を観察する。「アタリ」は「付近の場所」という空間的意味からの拡張と考えられるが、「今から講義を始める」の意図で「このあたりから講義を始める」と発言するのが不自然であることから、時間的意味の「アタリ」は進行中の出来事の範囲を前提にしていると分析し、時間的意味には空間的意味に還元できない特性が見られることを指摘する。また、「晴れているうちに帰ろう」「晴れているあいだに帰ろう」のように、時間的意味の「ウチ」と「アイダ」には類似性が見られるものの、両者は完全に交替可能なわけではない。ウチは空間的意味に由来し「ソト」との対比を喚起し、意外性を表出する効果をもつ一方で、アイダは時間の順序性に由来し、2つの時点から構成される時間枠の両端の明確さを喚起するとの見方が示される。最後に「トコロ」は、「読書をしているところに太郎がやってきた」のように時間と空間の曖昧性が認められる事例である。空間的意味をもつ名詞「所」が時間的意味に転用されるようになり、形式名詞として成立し、さらに「トコロデ」「トコロニ」のように助詞との接合によって次第にその振る舞いが副詞的になっていくことを観察し、次章の議論へとつなげる。

第6章では、名詞表現からの派生として、「来週東京へ行く」の「来週」のように副詞に接近した名詞表現に焦点を当てている。副詞は、時間的プロファイルをもつ動詞の修飾を行うものであることから、より直接的に時間の描写に関わる文法範疇である。こうした副詞類が実際には名詞と連続性をなすことを、両者の境界事例である「副詞的名詞句」を検討することで示す。先行研究に基づき、英語における副詞的名詞句の分類と日本語の副詞群を対照し、日本語においてどのような名詞が副詞的性質を持ちうるかを観察する。その結果、日英語に共通する事実として、副詞的に振る舞う名詞のほとんどが時間語彙に分類されるものであることを指摘し、さらに、副詞的名詞が時間語彙に制限される傾向は日本語においてより顕著であることを述べる。また、時間副詞に由来した空間的分布表現についても取り上げ、第4章に続き、認知意味論の基本的な想定である「空間表現から時間表現への拡張」の反例が存在することを指摘する。

第7章は論文全体の総括と展望である。時間概念があらゆる事態認知に不可欠なものであり、それ故に、様々な言語表現の意味に時間の持つ性質が反映されていること、時間の性質が言語表現を制限かつ拡張していることを示唆し、本論文の結論としている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、時間に関わる種々の言語現象を分析し、時間知覚が言語の意味にどのように関わるものであるかを探求した実証的研究である。その根底にある目的は2つある。第1に、時間知覚の言語への表れを詳細に観察することにより時間と空間の関係性を再考すること、第2に、時間表現の事例分析を通じ、従来日本語学で培われてきた知見に新たな分析の視座を与えることである。以下で、本論文が認知言語学および日本語学の研究として、どのような新規性を持ち、どのような貢献をなし得るか、各々の目的に即して述べる。

第1の目的について特筆すべき点は、時間概念に関する認知言語学の基本的想定を批判的に検討し、新たなモデルを提示していることである。認知言語学では「時間」という抽象概念が空間化メタファーにより構成されているとし、時間語彙は空間語彙からの隠喩的転用であるとみなす研究が多数を占めている。それに対し本論文は、空間概念に第一義的地位を与える見方そのものに疑問を呈し、時間概念が空間概念と同等の地位を有する可能性を主張する「両義的原義図式」を提唱することにより、空間概念のみに還元することのできない時間概念の特性をつまびらかにしている。特に、時間の根幹を「順序性」の概念に帰することでその固有性を有効に示しており、理論的に価値ある議論を展開している。また、第6章の「副詞的名詞句」の分析で示された日本語と英語の共通性からは、時間知覚に関わる人間の認知特性が示唆されており、認知心理学的研究への適用可能性が示唆されている。

本論文で主張される時間の固有性は、個別の現象の分析によって論証されている。最も端的であるのは第4章における「サキ」の分析であり、時間・空間の2つの用法間の関係性を、時空間それぞれの領域固有性および空間化メタファーの両面から検討した上で、EARLIER IS FRONT型の「サキ」が空間用法に還元不可能な意味を有することを強い根拠として時間概念の独自性を示している。第5章では「アイダ」や「トコロ」といった両次元にまたがる語彙を取り上げることにより、時間特有の拡張傾向を捉えている。これらの分析を通じ、「両義的原義図式」の提唱する「時間と空間が渾然一体となった両義的な事態把握」の妥当性が裏づけられていると言える。

次に、本論文の第2の目的については、時間に関連した表現として名詞や助詞、副詞的名詞句といった多岐に渡る品詞を横断的に分析することに

より、個々の用法の記述だけでは示すことのできない時間語彙の意味特性を明らかにしている点において独創性が見出だされる。これは、言語現象を認知的側面から俯瞰する認知言語学を理論的基盤としたことの成果であると見做することができる。また同時に、個々の事例研究で示されている緻密な観察力と記述力も評価に値するものである。例えば第5章の「トコロ」に関する分析では、「トコロデ」「トコロニ」といった時間的用法に見られる意味的相違を助詞の機能特性によって説明すると共に、コーパスから収集したデータを根拠とし、「トコロ」が時間的意味を帯びた際に生じる制限を詳細に述べている。さらに第6章では副詞的名詞にも踏み込み、名詞から副詞への拡張に時間概念が介在する可能性を示す一方で、副詞と名詞の連続性を詳細に考察することにより、「品詞」という伝統的な文法範疇の定義に対しても重要な示唆を与えている。このように、本論文の主題である時間表現に限らず、助詞や副詞の機能にも熟考が巡らされており、日本語教育にも資する記述となっている。

以上、本論文は、時間と空間という基本的概念領域の本質に果敢に取り組んだ意欲的な基礎研究として高く評価することができる。個々の事実の観察と理論的考察の均衡がとれており、細やかな語法を扱う日本語学的な知見や語用論等の分野での研究成果とも整合性をもつ内容である。第2章から伺えるように、本論文は哲学をはじめとする様々な学術分野の知見を背景としたものであり、その学際性も評価することができ、今後の言語学及び関連諸領域への貢献が期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年12月2日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 2016 年 3 月 23 日以降